

# 第一セッション各報告に対する シンジルト氏からのコメント

井 上 充 幸

コメンテーターのシンジルト氏からの、各報告者に対するコメントは以下のとおりである。

山田明広氏の報告は、台湾の道教儀礼のプロセスにおける水の重要性を、儀式の現場に即して詳細に解明したものである。課題としては、視点が宗教者の側に限定されているため、信者や地域住民からの観点を盛り込むべきことなどが挙げられる。

山西省東南部の析城山における湯王信仰の歴史的展開を明らかにした井黒忍氏の報告は、祈雨祭祀の分析を通じて中国の人と水をめぐる宇宙論に迫ったものであり、フィールド研究と歴史文献研究の手法を融合させつつ説得的に論じた点が評価できる。

中世の紀ノ川流域における神社と人々との関わりについて、祭祀における水の役割や生業との結びつきという側面から明らかにした川端泰幸氏の報告は、紀ノ川における水の神々の政治学と経済学とでもいべき内容であり、農民にとって水の神とは何か、という側面に力点を置いたものであった。

崔元碩氏の報告は、韓国の人々が、自然と人との相互作用を通じて生み出した水景観を手掛かりに、彼らの水に対する思想を風水から読み解いたものであり、一種の Cultural ecology 研究であると評価できる。

続いて質疑応答がなされ、シンジルト氏は、「自然と人」というテーマ設定の中に前提として含み込まれている二項対立的発想に着目し、近代西欧

において確立した知の枠組みに対して根本的な問い直しを行うべきこと、そして、東アジアにおける伝統的な感性あるいは思惟の方法に即して、人間の存在とは何かという問題を再検討すべきこと、などについて提言した。

そして、人のこころのありようは過去と現在で変化したのか、あるいは変わっていないのかという点をめぐって、中世人と現代人の「心性」に関する議論が交わされた。これについて、井黒氏は金・元時代における水神信仰の復興期における人々の情熱を、川端氏は弃天にまつわる村の伝承が現在もお息づいている様を、それぞれとりあげて所見を述べた。

崔氏からは、水景観を規定する自然的・社会的要素と、近代以降における水景観の変化についての説明があった。

最後に、伏見英俊氏から山田氏に対して、多様な水のシンボリズムの中から浄化作用のみをクローズアップしたのはなぜか、という質問もなされた。